

1960年代における小泉文夫のわらべうた研究と 音楽教育実践との関わり

—園部三郎・羽仁協子・日教組との関わりを中心に—

本 多 佐保美

千葉大学・教育学部

A Study on the Relationship between *Fumio Koizumi's* Children's Play Songs
Research and Music Education Practice in the 1960s.
: Focusing on the Involvement with *Saburo Sonobe*, *Kyoko Hani*, and the Japan Teachers Union.

HONDA Sahomi

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本稿では、1960年代における小泉文夫のわらべうた研究と音楽教育実践との関わりについて、その詳細を明らかにすることを旨とした。小泉文夫記念資料室の資料をもとに、小泉の1960年代におけるわらべうた研究関連の動向を概観し、園部三郎や羽仁協子、日教組や北海道音楽教育の会等の実践的著作に見られる小泉の研究の影響の状況を明らかにすることを試みた。どの実践的著作においても、小泉の研究で提起されたわらべうたの法則性がふまえられており、その法則性が学習指導の体系化の指針となっている。小泉の研究は、1960年代のわらべうた教育運動に一定の学術的根拠を与えたといえることができる。

キーワード：わらべうた研究 (Children's Play Songs Research), 小泉文夫 (*Fumio Koizumi*),
1960年代の音楽教育実践 (Music Education Practice in the 1960s)

1. はじめに

本研究の目的は、1960年代に音楽教育の一大思潮となったわらべうた教育の動向にたいし、音楽学者小泉文夫 (1927-1983) の提言および学術的成果が与えた影響を明らかにすることである。

2014年3月、小泉の33回忌を前に開催された「小泉文夫先生を偲ぶ会」をきっかけとして、小泉に学恩を受けた有志が集まり、小泉の理論が音楽教育界等に与えた影響を再検討する作業を進めることとなった (権藤他 2023)。本稿は、その共同研究プロジェクトの一環に位置付くものである。

共同研究を進める中で、コダーイの考えにもとづく音楽教育がシステマティックに実現しているハンガリーの音楽教育においても、自民族の伝統的音感覚の萌芽であるわらべうたが大切にされていることに注目した。そして、ハンガリーの音楽教育の実態を知りたいと考え、ハンガリーへの渡航・視察を計画した。コロナ禍を経て2024年4月～5月にハンガリーへの実地視察が実現したところである。その計画の過程で、ハンガリー在住の音楽教育者、伊藤直美氏との出会いがあり、オンライン講座等を通じて数々の学びがあった。

2021年5月から6月にかけて、ハンガリー文化センター東京主催のオンライン講座が開催された。この講座は、「コダーイの音楽教育の理念、幼児教育、芸術教育

が日本にどのような影響を与えたかについて、フォライ・カタリン、ヴィダ・マーリア、羽仁協子の繋がりの中で見る」(第1回講座における伊藤の言葉) という講座で、伊藤は講座の第1回目において、「コダーイの音楽教育～日本への導入と広がり～」と題して発表を行った¹⁾。本稿では、伊藤の提言から着想を得て、あらためて小泉とわらべうた教育との影響関係について概観し考察・検討しようとするものである。

小泉とわらべうた運動との関わりについて、島崎篤子は、「小泉が主張したわらべうたを初めとする日本の伝統音楽や世界の諸民族の音楽の教材化の提案は、当時の音楽教育界に大きな影響を与えた」として、1950年代末から1960年代の音楽教育界の動向を整理している (島崎 2012, p. 119)。当時、小泉が執筆したわらべうたに関する論考は、著作『子どもの遊びとうた—わらべうたは生きている』(1986) にまとめられている。

2. 1960年代における小泉のわらべうた研究関連の動向

2022年5月および7月に、東京藝術大学小泉文夫記念資料室にてわらべうた関連の資料調査を実施し、当時の雑誌記事や、NHKのラジオやテレビの放送台本の閲覧、また当時調査されたわらべうたの録音資料の視聴等を行った。その際、1960年代の小泉のメモ帳を閲覧することができた。小泉のメモ帳より、わらべうた研究関連の動向を抜き出してまとめたのが表1である (ただし1960、

連絡先著者：本多佐保美 honda@faculty.chiba-u.jp

表1 小泉のわらべうた研究関連の1960年代の動向

年	月 日	時 間	記載事項
1963	2月15日 (金)	午後2時～4時	世田谷の中学校のため、教材曲の具体的指導曲
	2月23日 (土)	午後1時～2時	わらべ唄・研究発表, 音舞会 国際芸術センター
	2月24日 (日)	午前10時～12時半	NHK録音, 2st, わらべ唄録音, 三谷さん
	2月26日 (火)	午後1時	わらべ唄, 老人の分類
	3月26日 (火)	午後1時から	わらべ唄, 1時から, 音階 FM
	4月4日 (木)	午後1時	わらべ唄
	4月9日 (火)	午後1時	わらべ唄
	4月11日 (木)	午後1時	わらべ唄
	4月16日 (火)	午後1時	わらべ唄
	7月3～5日		ISME
	7月27日 (土)		東京書籍
	12月26～28日		東書合宿
1964	8月31日 (月)～9月10日 (木)		Budapest, Athenai, Beirut, Baghdad, Tehran, Tokyo
	10月16日 (金)	午後5時半～10時	東京書籍
	10月17日 (土)	午前	ウラジオストック号, バルトークさん
	10月19, 20日		音楽学会 バルトークさん
	12月24日 (木)	午後1時～6時	わらべ唄〇〇 芸大
1965			時間割 火曜3, 4限 わらべ唄大学院
	1月21～28日		文化会館 アジア地域音楽教育ゼミナール
	2月25日 (木)	午後1時～4時	芸大わらべうた 3時東書来る
	3月9日 (火)	11時～4時	お茶大 わらべ唄
	3月13日 (土)	6時	うち わらべうた
	3月17日 (水)	11時30	うち わらべ唄
	3月24日 (水)	11時半～4時	芸大12室 わらべ唄
	5月18日 (火)	午後5時半	音舞 文化会館
	6月24日 (木)	9:10～10:00	教育大 (小学校) 授業参観
	6月25日 (金)	2:30～4:00	同上 教育大小学校
	6月27日 (日)	午後1時～9時	文化会館 音舞会大会
	6月28日 (月)	午後1時～5時	わらべ唄のダビング 芸大
	7月2, 3日 (金, 土)	午後6時半～9時	神戸労音 神戸三宮国際会館会議室, わらべ唄テープ使用
	7月4日 (日)	午後2:30～4:30	明星小学校
	7月6日 (火)		ハンガリーの教科書
	7月24日 (土)	15～17時	名古屋 大谷派合唱 (仏教音楽の本質と民族性)
	7月27日 (火)		11時音出し わらべうた 芸大
	7月29日 (木)	午後8:30	ハンガリー座談会
	8月17日 (火)	11時～5時	わらべうた
	11月26日 (金)	午後2時～5時	九段小学校 日本音楽 比較譜的に
1966			時間割 火曜4限 わらべ唄
	2月15日 (火)		音出し2時 わらべうた
	2月16日 (水)	午後1時～7時	大西君のテープ ダビング

1960年代における小泉文夫のわらべうた研究と音楽教育実践との関わり

	2月18日(金)	午前11時	8時名古屋 ヒカリ 11時菊里高校
	4月13日(水)	12:30~14:00	(早稲田) はじまり わらべうた NHK理論
	6月14日(火)	午後1時~	わらべうた 小泉 ○○ 小柴 小島
	7月13日(水)		利根川わらべうた NHK
	8月23日(火)	10:30~	わらべうた
	8月28日(日)~9月3日(土)		アジア・太平洋会議
	8月30日(火)	10:30~	わらべうた
	9月6日(火)	10:30~	わらべうた
	9月7日(水)	午後6~10時	NHK 456Bスタ 利根川わらべうた
	9月20日(火)	10:30~	わらべうた
	9月27日(火)	10:30~	わらべうた
	12月24日(土)	午前10時	わらべうた 家でやる
1967	1月31日(火)	午後3時~6時	わらべうた
	2月6日(月)	午後5時~8時	日比谷2st お母さんの勉強室 現代のわらべうた, 現代の子供の音楽, 山田アナ司会 子供のうた 教科書, コマソン, わらべうた, 童謡 学校さがす 5年生を米沢純夫さん お手合せ 絵画き まりつき なわとび 替歌
	2月7日(火)	午後3時~6時	わらべうた
	2月8日(水)	11時~1時	文部省 教育会館「世界の民族音楽と日本音楽」50名
	2月14日(火)	午後3時~	わらべうた
	2月21日(火)	午後3時~	わらべうた
	3月9日(木)	午後7時~	わらべうた 利根川
	3月27日(月)	午前11時~	ユネスコ
	3月28日(火)	午後3時~	わらべうた
	4月7, 8, 9, 10(金~月)	午前11時~	11時 中井駅集合 わらべうた調査
	4月10日(月)	午後2時~5時	ユネスコ 次長室会議
	4月11日(火)	午後2時~5時	わらべうた
	4月27日(木)	午後5時~10時	わらべうた
	5月4日(木)	午後2時~8時	わらべうた
	5月11日(木)	午前11時~午後10時半	わらべうた
	5月19日(金)	午後5時~7時	ハンガリー
	5月20日(土)		長野 福祉会館 音楽教育における日本音楽
1968	表紙裏		羽仁 フォーライさんの件
	2月5日(月)	午後2時	羽仁さん
	2月6日(火)	午後6:30~	七階サロン カワイ渋谷 わらべうたの会
	2月13日(火)	昼から	わらべうた
	3月26~28(火~木)		家でわらべうた
	7月29~31(月~水)		わらべうたゼミ
	7月29日~		ハンガリー教育 北海道
	8月11日(日)		わらべうたりハーサル
	8月12~14(月~水)		わらべうたゼミ
	8月12日(月)	午後5時~7時	ハンガリー大使館

	8月16日(金)	午前9時から	フォライ女史指導参観
	8月16日の欄に		ハンガリー2回 1回はフォライさんの話だけ 2回目 テープ 1. 子どもの言葉のリズムと音楽 わらべうた 詩→現代詩 2. 民謡
			5~16日午後 都内 Field Work 保育園(明星)を参観してほしい。 芸大グループに来てほしい。質問して教えてもらいたい。 1日, その時間もちたい。
			8月18~23日, フォライさんField Work 20~22日 フォライさん名古屋
	9月4日(水)	午前10時30分~	小泉家でわらべうたの会 ユネスコの会議欠席予定
	9月23日(月)	午前10時半~	わらべうた
	9月23日~		日本文化会議 23~25東京, 26~28京都
	11月15日(火)	午後	わらべうた最終会
	12月3日(火)		わらべうた選ぶ
	12月6日(金)	午前10時~14時	わらべうた 407st 1時間番組 種類別
	12月23日(月)	午前10時~	わらべうた
	12月24日(火)	午前10時~	わらべうた
	12月25日(水)	午後4時~6時	NHK録音 外国のわらべうた 対談 CR401st
	12月28日(土)	午後1時~5時	わらべうた録音 605st
			笥三智子 子どもの国幼稚園
			西山英二 北区 神谷中学 波多野総一郎 世, 守山小学校
1969	1月7日(火)	午後1時	わらべうた
	2月12日(水)	午後1時~5時	わらべうた
	5月12日(月)	午後2時	NHK来る わらべうた 子供のうた
	6月8日(日)		歌謡学会 4時わらべうた
	6月9日(月)	午前10時~	ユネスコ会議
	6月14日(土)	午前11時	わらべうた
	6月14日(土)	午後6時30分	幼児の会 教育会館
	6月17日(火)	午後5時~9時	わらべうた

61. 62年の資料を欠く)。

メモ帳の記述なので、「わらべ唄」とか「東京書籍」, 「明星小学校」等, ただ一言だけの記述が多く, 内容の詳細までは不明であるが, それでも1960年代のわらべうたと教育に関する動向の概要を知ることができる。これまで小泉の年譜として整理され発刊されたものには, 小柴はるみ(1986), 岡田真紀(1995)があるが, それらの文献ではあまり言及されていない, 音楽教育界と小泉との関わりも見えてくる。

1960年に小泉は東京芸術大学に着任し, その翌年の1961年から始められたわらべうたの調査(岡田1995, p. 343)は, 1969年に出版されるまでに, 毎週のゼミにて継続的な研究が進められた。その成果は, 雑誌『ミューズ』(1962年5月~1963年9月)にて公開されるとともに, 音舞会(日本音楽舞踊会議)等の講座にて提案がなされ

たり, NHKのラジオ放送等を通じて広く一般に公開されていった。

小泉は多忙な中でも, 小学校や中学校等との関わりをもっていた様子が見える。1963年2月15日, 「世田谷の中学校」, 1965年6月24日, 25日, 「教育大(小学校)授業参観」, 同年7月4日, 「明星小学校」, 同年11月26日, 「九段小学校」などである。

また小泉は, 1966(昭和41)年, 東京書籍発行の中学校音楽教科書『新編新しい音楽』の編集に関わっている(本多2017)が, 1963年7月25日, 「東京書籍」, 同年12月26~28日, 「東書合宿」, 1964年10月16日, 「東京書籍」とある。1966年発刊の数年前である1960年代前半には, わらべうた研究の進捗と相まって, 中学校音楽教科書編集との関連からも小泉にとって音楽教育界への意識が高まっていたと思われる。

1960年代における小泉の著作・論文の初出年、小泉資料室に所蔵されている放送台本や雑誌記事等資料、そして園部三郎、羽仁協子らの著作の発行年が一覧できるように表2に整理した。

表2からわかるとおり、1960年代前半に小泉は、わらべうた関連の非常に多くの著作・雑誌記事等を書いている。1963年のISME東京大会で小泉は、7月4日に「東洋における過去と現在の民族並に芸術音楽」と題した講演を行っており（ヤマハ音楽教室1963）²⁾、その講演内容は『教育音楽』小学版、1963年、18（9）にて読むことができる。

ISMEの翌年、1964年、8月31日から9月10日にかけては、ブダペスト、アテネ、ペイルート、バグダッド、テヘランと回っている。伊藤直美によれば、ブダペストで小泉は国際民俗音楽学会に参加したのではないかと、そしてコダーイや科学アカデミー民俗音楽研究所所長ヤールダーニと話をしたのではないかとしている（伊藤直美他2021）³⁾。

また、1968年のメモ帳の表紙裏には、「羽仁、フォーライさんの件」とある。この年の8月にフォーライ・カタリンが来日した。メモ帳の8月の欄に、「5～16日午後都内 Field Work。保育園（明星）を参観してほしい。芸大グループに来てほしい。質問して教えてもらいたい。1日、その時間をもちたい」、また「8月18～23日、フォーライさんField Work。20～22日、フォーライさん名古屋」とあり、羽仁協子の仲立ちにより小泉とフォーライ・カタリンが関わりを持ったことがわかる。ちょうどその年、1968年、フォーライ・カタリン著、羽仁協子訳の『ハンガリー子どもの遊びと音楽』が出版されている。

以上、1960年代のわらべうたに関する動向を小泉文夫を中心に詳細にたどると、1960年代前半の小泉の著作等による積極的な発信を音楽教育界が迅速に受け止め、わらべうた研究での成果を実践の指針として取り入れていった状況が見えてくる。とくに1963年、ISME東京大会のあった年、小泉はわらべうたに関する多くの著作によってその意義を発信している。また、『日本伝統音楽の研究』（1958年）の影響も大きかった。園部三郎・山住正己による共著（1962年）にも小泉の研究への言及が見られるし、1960年代後半には、藤田恵一、羽仁協子、また日教組や北海道音楽教育の会が発行した実践的著作に小泉のわらべうたの研究の成果をふまえたわらべうた指導の実践の体系化への指向が見られる。

次項では、園部三郎、藤田恵一、日教組、羽仁協子、北海道音楽教育の会の実践的著作に見られる小泉のわらべうた研究の影響の状況を明らかにする。

3. 小泉のわらべうた研究の実践現場への影響

(1) 園部三郎と小泉との関わり

園部三郎（1906-1980）は、日本にはじめてハンガリーの音楽教育を紹介した人物と推測されている（木村信之1993, p.203, 中村隆夫2006, p.177）。園部は1956年発行の著作にて、ブダペストにてコダーイと会ったことを報告している（園部三郎1956, pp.132-137）。

一方、園部は、日教組教研における発言でも注目される。

教研全国大会音楽分科会、第6次教研（1957）にて「西洋音楽も日本音楽も必要である」ことを述べ、第11次教研（1962）では、東京・大阪からわらべうたを音楽教育の基礎にしようとの提案があり、このとき園部は教科書二本立て構想を提案している（四童子他2011, p.150）。

また、園部と山住による共著（1962）では、「嬰兒期を脱しかけて、言語生活が始まると、子どもにとって新しい音の世界がひらける。それは、ことばに抑揚（イントネーション）をつけて語るということである」、「ここで大事なことは、〔中略〕必ず日本語で語り、またくちずさみはじめるということである」（園部・山住1962, pp.184-185）として、母語の発展としてのわらべうたの重要性を述べている。そして、この著作の中で、小泉（1958）をもとに、わらべうたの音組織について具体的に示している。

・長二度の音程の二つの音だけでできている音（二音歌）は、終止音が上の音になる。

・三つの音からなる三音歌の場合は、終止音が真ん中の音になる場合がある。

・核音やテトラコルドといった用語は使われないが、「レドラ」といった音の枠組みが示されている。

わらべうたは、「日本語の旋律の発展であり、またそれが、日本音楽の音階的基礎であるという意味で重要になってくる」（園部・山住1962, p.192）として、音楽教育の出発点にわらべうたを取り入れることを提唱した。

1963年、雑誌『教育音楽』小学版の座談会にて、小泉と園部は同席している⁴⁾。ここで小泉は、わらべうたを「子どもが自分の生活のなかで作るかえていったうた」、「大人のはやりうたといったものを材料にして、子どもが作りかえた」ものだと定義している。また、「わらべうたのなかに〔中略〕、子どもは自分の創造性を表している」、わらべうたを調べてみると伝統的な音階が支配的である、わらべうたのようなプリミティブだが伝統的な音感というものを、教育の中でエンカレッジされたことはこれまで一度もなかったと述べている。一方、園部は、「各国の子どもは、生まれるとすぐに、それぞれの文化圏のなかで生活して行ってそこで独自の感性をもつようになる」、「子どもが生命力を自発している歌〔中略〕から出発すべき」、「いま大事なことは、日本語と直結している子どもの歌のなかにある法則性をみきわめて、系統学習を考えることだ」と主張した（『教育音楽』小学版、1963年、12月号、座談会より）。

子どもの主体性、自発性、創造性と民族的音感を重視し、その具現であるわらべうたから出発すること、そして学習指導の系統性も必要であると考えていた園部にとって、わらべうたに内在する音楽的法則性を科学的に明らかにしようとした小泉の一連の研究は、その実践に学問的根拠を与えたといえる。

(2) 藤田恵一他の著書（1965）と小泉の研究との関わり

1965年に発行された藤田恵一編著『入門期の音楽指導—子どもの遊びと音楽教育』は、藤田（明星学園）、岡田隆（荒川区立第三中学校）、遠山由紀子（和光学園）、本間雅夫（和光学園）、藪木紀良（渋谷区立富谷小学校）による共著である。藤田は、1968年、羽仁協子の引率に

表2 1960年代わらべうた関連文献表

年(S = 昭和)	小泉の著作・論文	小泉資料室所蔵資料	その他の著作・論文または出来事
1956 (S31)		NHK第1放送 ラジオ放送台本「婦人の時間 わらべ唄(二)」	園部三郎『東ヨーロッパ紀行』平凡社
1958 (S33)	『日本伝統音楽の研究』音楽之友社		
1961 (S36)	「民俗音楽から芸術音楽への発展に関する三つの問題点」 伝統音楽研究会(子遊) *注	NHKテレビ放送台本 ものしりカレンダー「わらべ歌」 1月4日、小泉文夫(資料提供) 後藤田純生(担当)	
1962 (S37)	「一般音楽教育に関する一つの提案」『教育音楽』4・5月(子遊) 「日本のリズム」連載『音楽芸術』1962. 5~1963. 11	日本教職員組合編『わらべた第一集』五線譜つき(所在不明) 『Muse』わらべうたの研究報告(赤羽, 柘植) 1962. 5~	園部三郎・山住正己『日本の子どもの歌』岩波新書
1963 (S38)	「日本のわらべうたを取り入れるために」『教育音楽』小1月号 「わらべうたに結びついた器楽教育を」『教育音楽』2月号(子遊) 「わらべ唄の世界」平凡社世界大百科月報(子遊) 「わらべ唄の研究から」全国労音ニュース(子遊) 「民俗音楽から芸術音楽への発展に関する三つの問題点」『教育音楽』小18(9)(ISMEの講演内容) 「新しい音楽教育の出発点」教育の窓(子遊) 「座談会 わらべうたと音楽教育その1」『教育音楽』小18(12)	園部三郎「コダイ・システムについて」『Muse』1963. 4 「民族音楽・舞踊の継承と創造のための 第一回伝統芸術研究集会記録集」小泉文夫「何故わらべ唄を研究するか」1963. 12月発行, 全国労音内日本音楽舞踊文化会議	7月, ISME東京大会
1964 (S39)	「座談会 わらべうたと音楽教育その2」『教育音楽』小19(1)		8月, ハンガリーブダペスト, IFMC
1965 (S40)	「ハンガリーの田舎ジプシー」『フィルハーモニー』37(11)		藤田恵一『入門期の音楽指導』明治図書
1966 (S41)			日本教職員組合編『国民のための教育の研究 実践音楽編』 東京書籍中学校音楽教科書『新編新しい音楽』発行
1967 (S42)	「わらべうたを出発点とする音楽教育」『音楽教育研究』12		
1968 (S43)			羽仁協子「コダイの音楽教育観」『音楽教育研究』連載 フォライ・カタリン, 羽仁協子訳『ハンガリー子どもの遊びと音楽』明治図書

1969 (S44)	「わらべうたはどのようにして育ってきたか」『音楽教育研究』11 (子遊) 『わらべうたの研究』楽譜編・研究編, わらべうたの研究刊行会	渋谷傳『新しい音楽教育の実践—わらべうたを起点とする』音楽之友社
1970 (S45)	「非ヨーロッパの音楽教育から学ぶもの」『音楽の世界』7月号 (子遊)	北海道音楽教育の会『わらべ唄と日本民謡によるたのしい222のソルフェージュ』上下, 全音楽譜出版社

*注 (子遊) は『子どもの遊びとうた』(1986) 草思社に再録されているの意。

より日本人教育者グループが初めてハンガリーを訪問した中の一人であり、帰国後「子どものための音楽教本を作成しコダーイ教育法の普及に努めた」という人物である(中村 2006, p.178)。

この本の序に小泉が言葉を寄せており、まえがきには、東京芸大のわらべうた研究グループの研究成果をふまえたことや、未公開の資料の提供を受けたこと等が記されている。

本書では、子どもの歌を伴う遊びの教育的意義が考察され、遊びの「舞踏性、ドラマ性が、子どもたちの歌の表現を、実感のこもったものに」(p.45) するという。指導実践をふまえた遊びの分類と系統が記述されており、歌の音楽的終止感や拍節感、フレーズ感などと遊びの動きとの関連に意味があるとして、数多くの具体的なわらべうた遊びの詳細と指導法の説明に多くの紙面が割かれているが、音階の系統性について、pp.41-45において、

- ・二音歌 長2度の音程 上の音で終わると終止感があり安定する
- ・終止感のある音を「核音」と呼ぶ
- ・三音歌 長2度が2つつながったものは、真ん中の音が核音となる。ミソラなどの4度わくでは核音が両端の音、2つとなる。
- ・半音(ミファ、シド)が含まれる4度わくもある。

このように、小泉の研究成果をふまえた記述が見られる⁵⁾。

(3) 日教組(1966)と小泉の研究との関わり

『国民のための教育の研究実践 音楽編』は、教研全国集会11年間の成果をなんとかまとめておきたいと企画され発行された著作である⁶⁾。

戦前の教育の反省の上にたち、日教組は、学校唱歌への批判、そして「生活から音楽を」という発想への転換、また子どもたちが本当に生命を燃焼させて歌える歌を、という方向性をもって研究が進められた。

「子どもの生活に目を向けようとしたことから、〔中略〕わらべ唄が子どもの生活に欠かせないことを発見した」(p.31)。すでに第6次(1957年)の山口、奈良レポートが、こうした問題の重要性を指摘していた。

第11次(1962年)東京レポートでは、「その子どもたちが現に歌い、自分のものになっているわらべ唄をまず集め、それを授業に取り入れようと」し、「歌わせるだけでなく、音組成を分解して、音を自覚化するための教材化を試みている」こと、また「旋律だけでなく、伝統的

なりズムと結合して合奏、合唱曲に編曲され、授業に使われ」るなど、多様な実践が行われ大きな成果をあげていることが報告された(p.33)。

この実践を支える根拠として、小泉の研究が言及されている。「日本伝統音楽の構造が、科学的に分析され、それが公になったのは、小泉文夫『日本伝統音楽の研究』によってである」、「この内容がわらべうたに適用されて教研に報告されたことにより、(11次・東京)その後の音楽の指導内容を系統だてていく仕事が大きく前進した」(p.37)という。

なぜわらべうたか、という点について、「現代の子どもがなお生産しつづけている音楽であり、日本語で口ずさむとき、今でも江戸時代のわらべ唄と同じ旋法によるものである。ここに、わらべ唄から音楽教育を出発させる大きな理由がある」(pp.42-43)とする。すなわち、日本語を話す日本人の民族性が、子どもが今なお歌っているわらべうたには表れているということである。

本書、pp.149-175には、小泉(1958)『日本伝統音楽の研究』をふまえ、わらべうたの旋律構造の法則がまとめられている。以下の内容である。

- ・2音連続の場合は上の音で終止する。
- ・3音連続の場合は、真中の音で終止する。
- ・4度音程のわくであるテトラコルドについて。
- ・終止感があり、安定している音のことを核音という。
- ・民謡、都節、律、琉球の4種のテトラコルドについて。
- ・テトラコルドの積み重ね、コンジャクトとディスジャントについて。
- ・1オクターブの音階について。
- ・テトラコルドの混合について。

そして、実際の楽曲、《一奴の一助さん》、《清水の観音様》、《こきりこ節》、《ひえつき節》等がどのような旋律構造になっているのかを、テトラコルドの理論を用いて分析している。

(4) 羽仁協子と小泉との関わり

羽仁協子(1929-2015)は、自由学園の出身で、齋藤秀雄のクラスで指揮を学んだ。1953年、渡欧。ウィーン、そしてライブツィヒにて学び、1958年からハンガリーに住んだ。コダーイ・ゾルターンとも知己を得る。1959年から1967年まで、ブダペスト大学で日本語を教え、1963年のISME東京大会では、セーニ・エルジェーベトの通訳と案内をした。1967年に帰国した(伊藤他 2021, p.3)。

前項で見たとおり、帰国の翌年、1968年に、羽仁は小

泉と連絡をとり、フォライ・カタリンを小泉と引き合わせている。

フォライ・カタリン他著、羽仁協子訳(1968)において羽仁は、ハンガリーの音楽教育の方法を紹介しながら、「訳者解説」欄では、日本の子どもたちにどのように適用するのかについて具体的に述べている⁷⁾。

本書ではまず、「うたをいつも全体的に、はじめからことばと旋律と遊びをいっしょに同時に教える」(p.24)として、となえごと(となえ歌)から始める。次に、「同じはやさで、均等な歩調で歩くことは、子どものリズム感を発達させる」(p.29)として、歩きながらするとなえごとの実践が提案される。

「私たちが曲の性格に合ったテンポをつかんだとき、それは必ず、子どもにも、子ども本来の運動意欲にぴったりと感じるを起こさせる」(p.37)と、身体全体で音楽を味わうことが示される。

ハンガリーの子どものうたも、日本の子どもの遊ぎうたも、2拍子である。そしてハンガリーと同じように、「2小節が必ずひと組になっている」。これはインターナショナルな基本的な性格である(pp.39-41)という。

日本の伝統的な音楽様式にたいする批判も、時々述べられる。「おはやし」と「うた」はつきものなのであり、その結果、リズムという大事な、いわばその生命力の源に近いものを「はやし」ととられてしまった「うた」は、きわめてノドから先だけの、体中の躍動を伴わない、半身だけの「うた」になってしま」(p.47)うという。手拍子を入れると、日本のおはやしの中での手拍子の感じが出てしまうことがあるので、手拍子をつかうのは慎重でありたい、うたうことの中にあるリズム感を子どもに体験させる「うたう手拍子」にもっていきたい(p.52)という。

清潔な音程とは、協和的な音程、よくとけあっている音程のことを意味する。音程とか音高について、「たったひとりの“私”というものはなくて、いつも、まわりの人、他人、他との関連においてしか“私”の立つ位置も、立ち方の“正しさ”もわからない」(p.66)という。

日本のわらべうたの特徴をふまえ、「半音のでてこない伝承的な子どものうたをもつ私たちのほうが、少なくとも、その出発点において、はるかに音楽的に教育的な(発達段階に即した)指導のできる素材をもっていることになる」(pp.73-74)ととらえている。

74ページ以降、日本の遊ぎうたの音程進行の特徴が、以下のように整理して示されている。

- ・ 2音 高い方の音に重点がある
- ・ 3つの音 まん中の音で終わる。どの音で終わるかは大事。
- ・ 3つの音
- ・ 4つの音 ラソファレ
- ・ 5つの音 ラソファレド
- ・ 文字化した楽譜(レター・サイン)について
- ・ 4度の枠(テトラコルド)と核音についての説明(pp.80-82)

ソファレ、ラソファレなどは、実音で示されており、階名唱は記されていないが、後半のページで、羽仁は、g音を「レ」とする移動ドで音組織をとらえている。

日本の子どものうたは、次のようになる(p.182)。

- ・ 2音歌、下向長2度「レド」
- ・ 3音歌「ドレミ」
- ・ 3音歌4度音域「レドラ」
- ・ 5音歌6度「ミレドラソ」

信濃のわらべうたより、鳥追いのうたが実例として示されている。

本書の最後に、羽仁は、音楽教育の実践家すべてが読むべき本として、小泉(1958)および「日本のリズム」の連載(1962~1963)を挙げている。

(5) 北海道音楽教育の会(1970)と小泉の研究との関わり

本書は、北海道音楽教育の会によって1970年に刊行されたソルフェージュ指導の教材楽譜集である⁸⁾。

この書は、北海道音楽教育の会の二本立て方式のB活動の具体であり、この書を用いての実践は数多く行われ、実践の検証を通して道音教の二本立て方式は、「東京・大阪・群馬サークル等の批判を受けながらも、理論を整理し、形を整えていった」(三村他2011, p.73)という。

本書の指導体系は、以下のようになっている。

- ・ 2音旋律「ラソ」「レド」

まず、歌詞のついた2音のわらべうたが示され、次に音符の下に「ラソ」「レド」などレターサインが記された文字譜が示される。

- ・ 3音旋律「ラソミ」「レドラ」

ここからは、2線譜による。歌詞のついた歌、次にレターサインの文字譜の順番は同じ。「ラソミ」など、4度わくによるわらべうたが示される。さらに、簡単な2パートによる楽曲も提示される(楽譜1)。

- ・ 4音旋律「シラソミ」「ミレドラ」

前項の「ラソミ」の4度わくの上に1音「シ」が付加された形である。ここから五線譜で示される。

- ・ 5音旋律「レシラソミ」「ソミレドラ」

前項の「シラソミ」に上の「レ」の音が付加された5音旋律によるわらべうたである。ここでの音の並びは、

楽譜1 簡単な2パートによる楽曲

下から、「ミソラ」の民謡のテトラコルドと、「ラシレ」の律のテトラコルドとが「ラ」の音でコンジャンクトされた形である⁹⁾。

・5音旋律「シラソミレ」「ミレドラソ」

「ミソラ」の民謡のテトラコルドに、上に1音「シ」の音が、下に1音「レ」の音が付加された5音旋律である。

・1オクターブの音階「ドラソミレド」

前項までは、音階中の4度わくの両端の音（核音）が白抜きで示されていたが、ここではそれがなくなり、「ドラソミレド」の1オクターブの音階として示されている。実際の楽曲は、終止音が「レ」だったり、「ソ」だったり、「ラ」だったりする。

・最後の項では、民謡から素材が取られている。ただし、歌詞や曲名は書かれていない。

本書は、「子どもたちが自分を通して積極的に歌うことの喜びと楽しみをもつために、そして音楽の表現をより豊かにしていくためには、それを支える視唱力視奏力がどうしても必要」になる（上巻, p.37）との考えのもと、作成されたものである。小学校中学年以上、中学生までを対象としている。指導方法として、ハンドサインで音程を空間に認識させる方法、音程を定着させリズムを正確にとるため、レターサイン（文字譜）も用いられている。

本書は、ハンガリーのコダーイによる指導方法と、小泉のわらべうたの研究から導き出された法則性をもとに体系化され作成された、ソルフェージュ指導の教材楽譜集であるといえる。

4. おわりに

本稿では、1960年代における小泉文夫のわらべうた研究と音楽教育実践との関わりについて、その詳細を明らかにすることを目指した。具体的には、小泉文夫記念資料室の資料をもとに、小泉の1960年代におけるわらべうた研究関連の動向を概観し、そして、園部三郎や羽仁協子、日教組や北海道音楽教育の会等の著作に見られる小泉の研究の影響の状況を明らかにすることを試みた。それぞれの著作において濃淡はあるが、どの実践的著作においても、小泉の研究で提起されたわらべうたの法則性がふまえられており、その法則性が学習指導の体系化の指針となっていることがわかった。小泉の研究は、1960年代のわらべうた教育運動に一定の学術的根拠を与えたといえることができる。

ただし、もっとも体系的で具体的な教材集として提案された北海道音楽教育の会の著作においても、民謡のテトラコルドとその発展の内容にとどまっておらず、都節や律、琉球のテトラコルドの扱いについては言及されていない。

また、羽仁の著作はもとより、藤田や北海道音楽教育の会の著作では、ハンガリーのコダーイの指導方法論によって、小泉の学術的成果やそこから導き出されたわらべうたの法則性を学習指導の実践に合うように具体化する、ということがあらためて確認された。

これらの実践的著作により実際に授業が行われ、そこで子どもたちの音楽性がどのように伸長したのか。本稿

では、そのような実践の成果までは把握できていない。今後の課題である。

伊藤直美主宰によるわらべうた音階研究会が、日本とハンガリーとをオンラインでつなぎ、2021年以降、2024年10月現在まで26回継続されている。日本的音感を大切にした体系的音楽指導の実践に向けて、引き続き考察を深めていきたい。

謝 辞

本研究は、「はじめに」で述べたとおり、ハンガリー文化センター東京主催のオンライン講座における伊藤直美氏の研究発表、また、伊藤氏が継続して行っているハンガリーの音楽教育に関するオンライン講座、およびわらべうた音階研究会から多くの示唆を得ている。ここに記して感謝申し上げます。

注

1. ハンガリー文化センター東京主催講座「子ども・音楽・芸術～ハンガリーと日本～」。講座動画はYouTubeで見ることができる。<https://youtu.be/2q4AkdmmVj4> (2023年9月29日最終閲覧)。また、講座の内容はPDFにまとめられ、ハンガリー文化センターHPに掲載されていた(2021年12月25日ダウンロード)が、現在は削除されているようである。
2. 1963年『Muse』8月号の口絵写真から、ISME東京大会は、各種講演や授業実践紹介のほか、NHK交響楽団の演奏会、皇居での雅楽鑑賞、観世会館での能楽上演など、日本の音楽文化を広く紹介しようとするプログラム構成となっていたことがわかる。
3. 伊藤直美他(2021)の巻末年表「コダーイの音楽教育～日本への導入と広がり～」1964年の項より。
4. 他の同席者は、楠瀬敏則、松本恒敏の各氏。
5. ただし、ここでは「4度わく」とか「テトラコルド」という用語は使われていない。
6. 執筆者は、井口省司、板倉純、大塚鏑弘、大森清子、永田栄一、西山英二、波多野総一郎、古越三五郎、宮原義人、吉田廉士、米沢純夫、法元豊子、山住正己の13名である(本書あとがきより)。
7. 本書の冒頭、訳者のことばのページには、引用文献として『南日本わらべうた風土記』、『信濃のわらべうた』、『津軽のわらべうた』が挙げられ、加えて、「こころよく未発表の資料を見せて下さった芸大民俗音楽ゼミナールの共同研究者の諸氏」への謝辞が述べられている。本書巻末のp.200においても、小泉(1958)は、「音楽教育の実践家すべてが読み、理解しなければならない本だ〔後略〕」と述べている。
8. 編者は、津田甫、佐藤重夫、谷本一之、葛西明、泉陽一、宇野志美子、草刈道子、庄司務、折原澄子、佐藤仁美、荒野保、秋本伸一である(北海道音楽教育の会編1970、上巻, p.40)。
9. この本は、子どもが持つ楽譜集であることもあり、本文中にテトラコルド等の説明はない。テトラコルド云々は、本多の分析による。

参考・引用文献

- 伊藤直美, セーカーチ・アンナ, チョマ・オルシヨヤ(2021)「子ども・音楽・芸術～ハンガリーと日本～セーカーチ夫人ヴィダ・マリアと羽仁協子の交流を通して」ハンガリー文化センター東京HP掲載PDF (2021年12月25日ダウンロード).
- 伊藤(本多)佐保美(1991)「日本音楽の教材化の一視点—わらべうたの取り扱いをめぐって」『季刊音楽教育研究』68号, pp. 97-104.
- 岡田真紀(1995)『世界を聴いた男 小泉文夫と民族音楽』平凡社.
- 木村信之(1993)『昭和戦後音楽教育史』音楽之友社.
- 小泉文夫(1958)『日本伝統音楽の研究1』音楽之友社.
- 小泉文夫編(1969)『わらべうたの研究』上巻楽譜編, 下巻研究編, わらべうたの研究刊行会.
- 小泉文夫(1976)『世界の民族音楽探訪』株式会社実業之日本社.
- 小泉文夫(1986)『子どもの遊びとうた わらべうたは生きている』草思社.
- 小柴はるみ(1986)「小泉文夫先生年譜」, 『諸民族の音—小泉文夫先生追悼論文集』音楽之友社, pp. 789-805.
- 権藤敦子・大田美郁・加藤富美子・田中多佳子・本多佐保美(2023)『音楽を世界横断的にとらえアクティブに経験する学習へ—小泉文夫の音楽教育論を手がかりに』科学研究費補助金基盤研究(C)18K02625 研究成果報告書.
- 四童子裕・三村真弓・吉富巧修(2011)「戦後の日教組教育研究全国集会の音楽(芸術)分科会における実践報告の変遷—『日本の教育』を中心に」『広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要』XXII・XXIII, pp. 149-157.
- 島崎篤子(2012)「1960年代の学校教育における創作学習—わらべうたとふしづくり教育に着目して」『文教大学教育学部 教育学部紀要』第46集, pp. 115-134.
- 鈴木治(1992)「音楽科教育における『系統的な基礎指導』とは何か—音楽教育の会『二本立て』を事例に」『東北大学教育学部 教育行政学・学校管理・教育内容研究室 研究集録』第23号, pp. 63-74.
- 鈴木治(2005)「自主研究の立場の成果—園部三郎と『二本立て』。原点, 展開, 崩壊—」, 河口道朗監修『音楽教育史論叢』第Ⅲ巻(下)音楽教育の内容と方法, 開成出版, pp. 647-661.
- 鈴木治(2006)「『音楽教育の会』の活動とその成果」, 音楽教育史学会編『戦後音楽教育60年』開成出版, pp. 267-276.
- 園部三郎(1956)『東ヨーロッパ紀行』平凡社.
- 園部三郎・山住正己(1962)『日本の子どもの歌—歴史と展望』岩波新書.
- 中村隆夫(2006)「コダーイ・メソッドの導入と展開」, 音楽教育史学会編『戦後音楽教育60年』開成出版, pp. 177-187.
- 日本教職員組合編(1966)『国民のための教育の研究実践 音楽編』日本教職員組合.
- 羽仁協子(1968. 6-1969. 9). 「コダーイの音楽教育観(第一回～終)」(15回連載)『音楽教育研究』No.26-39.
- フォライ・カタリン他著, 羽仁協子訳(1968)『ハンガリー子どもの遊びと音楽』明治図書出版株式会社.
- 藤田恵一編(1965)『入門期の音楽指導—子どもの遊びと音楽教育』明治図書出版株式会社.
- 編集委員会編(1986)『諸民族の音—小泉文夫先生追悼論文集』音楽之友社.
- 北海道音楽教育の会編(1970)『わらべ唄と日本民謡によるたのしい222のソルフェージュ』上・下, 全音楽譜出版社.
- 本多佐保美(2017)「昭和40年代中学校音楽教科書にみる日本伝統音楽の取扱い—小泉文夫編集教科書における日本音階の学習指導を中心に」『千葉大学教育学部研究紀要』第65巻, pp. 7-13.
- ヤマハ音楽教室(1963)『Muse』8月号, Vol. 3 no. 27.
- 三村真弓・吉富巧修・四童子裕(2011)「北海道音楽教育の会の『二本立て方式による音楽教育』に関する研究—1960年代から1970年代の活動を中心に」『音楽学習研究』第7巻, pp. 67-76.
- 村尾忠廣(1978-79)「わらべ唄教材の退潮と二本立て方式」I～III, 『季刊音楽教育研究』No.16-18.